てるひこ

宇治拾遺 九

詞を省きたり

[V. 53]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 53
Copy 1
Asian
Japan
Cage

2004551302

某寺四寸の西より北五ノ丁ほどの
そのころ横川(よかわ)よりよき僧都(そうづ)とりいでて、いと
ようとうとき人にてこもりゐたまへりけるに、
のいもうと(尼君)ときどきまゐりおはして、なげき(嘆)をりてこれをなまう
でさうむつまじうやんごとなくもてなしてのあざり
とそへて、仏経などやうずることどもこころのさま
ばくもてなしたるこちたくいふ山ごえ
けうほどうりこのそくのおまへ(大尼)ちかうよび
よせていとそでうのうちをもおさへ
ずくてい(言)ひつづけたるもいとあはれなり
つれづれとまもりゐたるに、うちのもとうよりうり
けう人の家ありけるよとゞめて、そこどころやどめ
もらふ。ゐ(居)ていそぎ人を横川(よかわ)へやりたるに、

僧都の
山ごもりの程いとくつろいでゐたれど、
限のさ画ろうかやのそちの室(そう)にてるくやるんと
おぼろさえて、いそぎまゐりたまへるくもむべくも
あるかな人のさ画をこうげうまでこの中よもげん
あるてぐさぐさぐさ

ちゃんとやひいでて院寺(ゐんでら)修験(しゅげん)ちりあつまりられど、
一二日やどらんといひよやまを始へりられど、つゐ
をるちゃん晩日られまりはけてて、いとおやしくさ
宿もりのおされをよびてみてこころろなり(院寺訛)まさびた
やいこづくるる院のちゃん飯(でん)ごそ修験(しゅげん)訛)始めれ地まうでの
人いつひまでやどり始といへど、いとうるりおは
やけざこるちれど、へまるく心やすきをとて、こをき
やまを始(院寺訛)これおされれいもうくやどろへとこるるひ
さりらればどろそうるちつひるどてこころろ
先修験(しゅげん)つり始(修験訛)いくあれておそろしびる
所うるとこまて(訛)おとこころ始ちめちどの始この

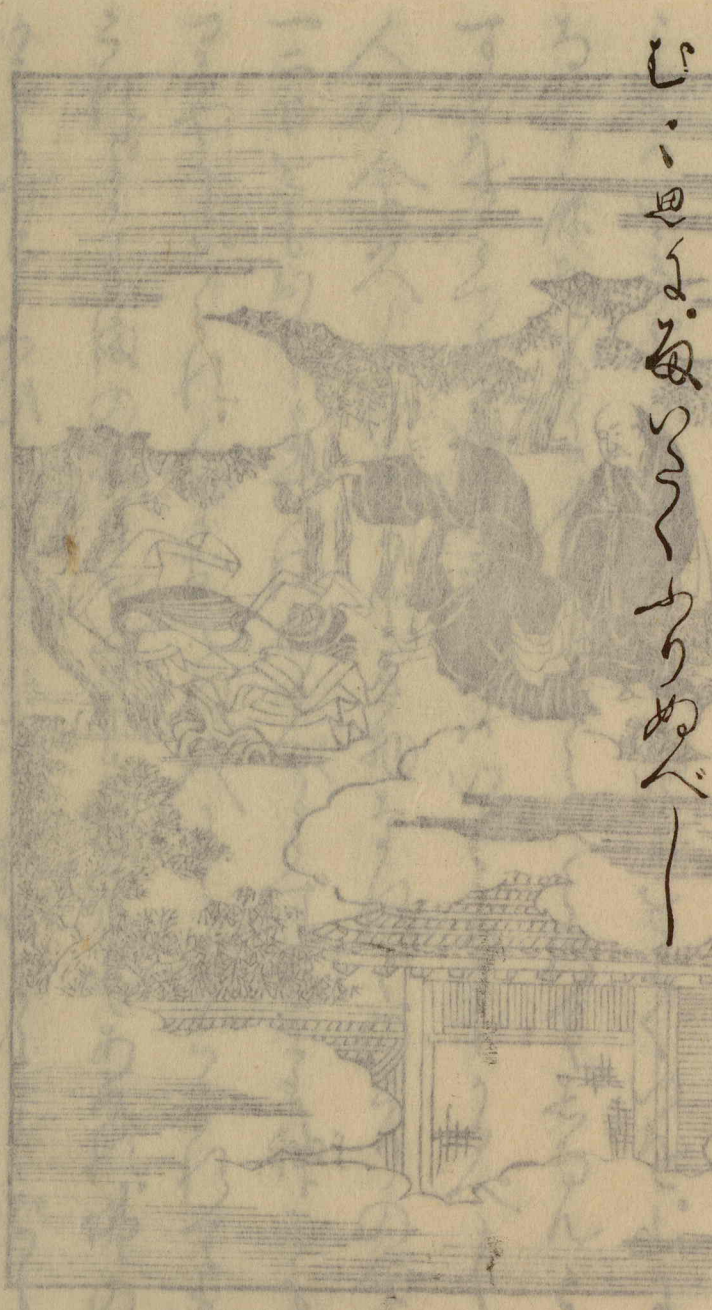
もつをよそひさうしあざうとおもひでやうたる
の風ひさうおもはざとのおろよふつきぐしさう程の
下げらう法師よ。火とともさをて人もよふめうもろの
うちよりいさうろう。まうふとくさゆるまのしうをうと
きうしげのつうりやとこ入うるよろこさまめくひろ
ぐりこうそこゆうれいかぞくと立さまりて。火をか
くうるうてこれがものくおろうをぐうるうさうくの
変化(へんげ)しうろうようてこうあうらいさんとて。ひさうは
いますうしあゆこうろう。うまひさういあるようおよ
うめもれちうんといひて。さやうのもれしぞく
ぐさおんつうりつく。さすぐよる伏(ふせ)ままうう(あざうん)しうらを

うこあふみやうりめぐさ心うすうこ。ゑ。ゑ。
うち犬ところ。ごぼうりまちくあふちさき。
くうりて。そのさ。ゑをこれバ。ぐこ。ゑ。ゑ。
うて。おろまの根（ね）のいとあくくこさうう
あて。いこうぐうぐ。めづ（大こ河）くこさくまもぐるれ。
俗称（ぞくしょう）のれ坊（ぼう）ふらんぎさせまらがやといへで。ぼ（あぢ河）
あやまちさくありとて。ひうりいまうでく。うる
こちぐやて。さう（俗称河）のの人よ変化（ズげ）ろといふうう
こうけぐ。まぐこあ把ありとて。ぼぐありてかり寸。投（ふれ）
ぼうり名（乃至を）らんとすることうりてぐおそどもこれ
もうぐくこさいこぼ（ぼ）ぐおろぐべくこさく

ぞをうつりよけいのそぐまれるりうれでおふびまりるどしうよ。ぐ四み人しそうるる
物をうるよ。そうこくまる。おやうてはをうつるまでうる。くおもあけそてるん。人うるまでいこおうかうんと心よううべき言やうこ宮(ぐん)も
のうりて心うよ。ろうやはよんうれし人
るり。さうる(俗数詞)ひざうのうくうめよれよあうぞ。りてうへるくるりうる人うはあうめまそてあれまうるうりけう人をすてうりけうがようこがへりうるといよ。るよのうる人をうる礼(法師ともう)のうちよそゆうん。そひまとよ人うちをうこのこをやうの

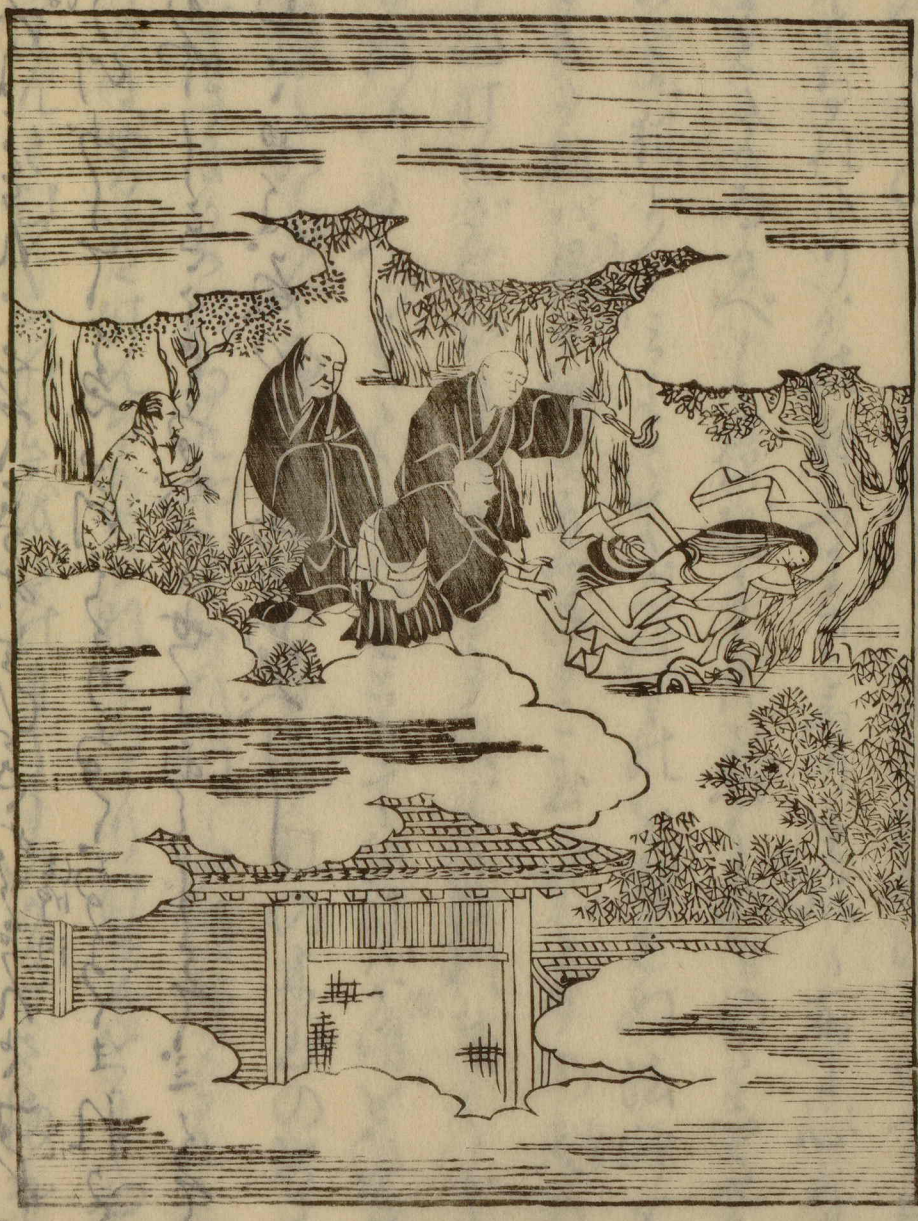
もみぢおざむらさてさうもてさうさうんまつそ侍くめ。
ひとみびんまもゐうれけづくひあうべき有まつそ
侍めれくいひて。おりゐう有まりのおのこをうぶ。
山彦（びこ）のこうもいとおそろ〳〵おやし（おや）のう陰（かげ）こ
ひさいさ〳〵あげて出さうり。寝（ね）まいつうさ女ろぐや（法師ゐ）
ま（ま）うゐ。うろっとろんあっとそ〳〵すれば（ば）さうの（ま）ま
つうまつうあり。これまのまくまろん。時ぐおや
しきつざろん〳〵侍う。おさ〳〵の秋もうく
侍う人のまの。ふろぐうりこ侍〳〵とうりてまうで
さうり〳〵ぐも。こおぞうず侍うさ。さそ（法師ゐ）そのちぐそ
もうやもうよ〳〵とうへがいさそ（おう）侍うさ。狐（さうろ）いさそそ

へをさびやうをぐ〻こもあ〻めやいとゝいふ病
いとなれうり。れ和あうさ多りまよ〻あ〻心を
ようさうるべ〻。俗都さらばさやうのものゝこゝろ
ワざゝ。れうくこゝよとそ。こゝれもれとそぐをめ法師を
ようきこれば。鬼（法師汁）の神ゝこゝろのりこむゝかぐゝりの天（あゝ）の
下のけんざれおり〻ますゝは。えうこれをゝぐ。
あよりのへ〻くとこゝめをうてのけば（浮）汁をの
れていよ〻くあ〻いでありさぐれのまむのさ
や。まさよゝれるんやくいのけ〻。汁をうんと
すゝは。ゝうさけんめもゝられもゝりけ。めさゝくや
あんとむくつけゝ。れもういうさゝ病を



人ようそんとそてこゝろあまりつゝそんとすれば
はうりがてこゝろにてこゝろをおやしきことうべてせよおろかごとそて
ミそむこゝ思よ。あいろくうめべし

注附訓



くてをもいろいろにこしらへてうべりめべしうるさ
のもとよりをいでうめくいふ修物(ものの)のこの人の
こころもちそれいのちさへめをおろくもそそん
ときいつくにてもとりて池よをうぐいをとる
もく麻をでうよ人うりさへくれてもるんと
すうをもつてうすけでうんいうとうるべし。
人の命久しうもまでも死なれどのうりの命
一二日をもつまずはあるべうず。鬼(き)も神(じん)も
つやうでうれ人よおうれ人よろうでうれても。
うれよろこ風のもとをすべうも死まそあれ佛の
うるでうでうでうものべでうでいうり礼心でうよしでう

ゆきのまをちぐてうすけふそんつるこまめぐく
いふうぐうおずとのおて。このだとうてて
ぐうられそせの伏。でてどもうぐうぐうさつぐ
れいうてつぐひ結人のれおうりよううめ地。
をうりわて。げぐひうてずおさちんとす
と。まぐくまあり文地の変化（でんげ）もおれがよふく
いけう人をうてあようちうてうそんいうてで
うとくうれぐうぐ。ぐよりつでそうぐいてさ
ぐく地とうてそのひうす地うれば人うはぐ
うめうれのうよちんおをうりけ。れ（荒田）ろ後
うをてあり結ぐ。うてうてぐり結とてて

もろ〳〵とびまりて、俗物(ぞくぶつ)うつくしいぐるり
ゆるやかなおもひなほ(法師)ものくるしてまもをいそがず、い
くらもいはず、おもよう物よけぐされよけう人よ
ことをいまうとの尼ぜやうて、俗(ぞく)ずぞくふ、
ものくのこと(俗)ちん、六年よおまりそう、光(尼)ぐる
ちう物をこの人つうとの給(尼)うちくまる(物)をのが
(尼)ちまうてこう、衣ありさいうやうちう人でまづその
こと(俗)うんくるそこの給(俗)ごこのひぐのやうどぐる
ちん俗(ぞく)ものやうんぞくいへ(尼)でいそぐりて
こうよ人もりつぐでですてをこうこうぐ
つうつうてげるぬ(法)の、こうさあやのこあ一

おれあぐりこいつおされいぐてあやとるさ此あつこ
るりといふへで神ちどれれさあよ強よさこつていのう
係掛もさこのぞさそへいくまでちまれもつぐぞと
くてうこそへとの名へぐいぐくうだぐよさそ
まてゆくやうちれいえつのさ係ぐすぐろ女けが
らひこさりてまづふべさこと・さすぐるいく
やんぐくちさへまそ係めれもうまつともつぐ
やいとそてさそ名もんこぐうこそつぐうとのの
あへりおれ後人なさうまおつぐうこさまぞ
あるちぐちらぐさあつ尾ぢいおやのまぐこの名
りも・ふ人をつけてこさこさ四さうあそてうち

つけさひおもふらくのみ人もなれどもあれそまふ
おもくれいつごろもまでとそふ恨(うら)おもひ
さはぐそうさすごよはぐめつあげおもぐつ洞の
つきをまおもぐくを(尾州)おもふ心うやいつごくまと
もの人のそうよ仏のそらびさまへるとき夢ゆ
さひもくもり給まぐ神ごもるらとやおもん
そうべき契まてそくをなもあをいそくあ
の給へといひつぐれど(注)うつうつしていそ玉ふり
きも。おやきさおうの人もり人なきでもこの
河もおもくいれそまでいそれもるよいふ。(尾州)まれ
まものおをまれくとそうよおるいそぐやいう

なれどくの給ぞいとうてさうはあらぬ
ものぞとへども（尼定）（な）抱もいとずぬめ（尼定）男はもしこぞか
どやおとんとてこれどこゝゝゝゝゆるあるく
ゝゝゝてこれがおさまりくるまで殿こる人の心
もどゝんとそ出さうりの抱やとうこゞふ
二日ごりこもりおて、おとりの人を初てとぐする
ゝふこゝず、おやもさゝをさゝをぐゝをつゝりの
ドやもどの信都よつゝまつりけるうてをり
ますもりとてゝもゝひぞゝるも、共ごうりもど
おていふをけが故八文のれ女（むすめ）（主）芸有愛のゝひ
給しぐゝとはもやゝ給ゝもまくてゝはうはうれ

ふるさとくるまのめぐるもあさめれどくるまとてあるべき人もうめくもんもびんてるまとそてうるこの人(ひと)
ゐていてくるまのぼりみちのほどもいとおもしろくうれしと心ぞときめきするいのあくる車(くるま)
してかいぐのりてまゐるほどつゆまもいねまほしうつごのひ人(ひと)をおこして、ゆき(雪)もやうず車(くるま)をめして、
ひろのりそひて、なをそぐ(ぐ)りもやうず車をめして、
ゆまりちぐ(ぐ)り(大尼)ひえざかよをゆとうち(大尼)ぞ
ときこえけるそてまおりてつくほどいとさむし中
やどりをそまうくべりけるちぐ(ぐ)りいひて、我あけて
おりてつゝめ、修(大尼)ぬいおやをあうひむすめのおも

ぶいろれもてめ人をもぐてて、れいぐきあろ
ーつてやもむ、おいの病(大だ)のいめ(やま)ともるさがろーと
心ゆへーぐそろ(こう)のるぐりてそぐーつぐひ話
それやうくよろそうろり話よそれぐ、傍(かた)ばいの(山)
ぼりのめ、ろ人もんおてそろろるぐ、法ーの
あろう足よろめくろれぐ、ぐぐりー人ゆは
まのぐず、足ぶもろれろぐめをひ、ま(足えん)弱(ろれ)
ろう人もやあっとやふもぐ心ろー、いぐでろう
お中べのもむあろうよろ人あうあづれけん、
おまうでろぐそろうけう人のろちぐつぐひ
けんを、まてぬろぐやうの人のろぐりてぐをろる

ゆゑなどぞやうりけん。河よりなどてきつひに
一言もいはで地もさらにの給ふものなどいとあは
つかなくそいつくしうかしこまりてこんとさする。
つくづくとてあさぼらけまるくらとおやしう
のこものへなどおるいくまどさへやと
おひなどうちすてんもいとおしうなどて。
ぐうもいでてくだめうういのこをおぐり
まもまびやうそくやくをそなへおこなひ
おこなひなどして四五日もものいとよくまびしう
ひるさこをさまびて。修法のやうをおり
てこの人ゆゑさすがにまでもあるい

新撰三巻子を焼るの事

又伝

げるものどもうちあるくのこゑしづかにきこえ
らしきものゝくてゐるさまつゞきうちよりかは
かゆかたくくのまへにつゞきそこよりもれ
る人のおほくはゐでそこのそこそこ
こゑのそとにやうやうくるりけん人のかほのうめ
れくぐくのむこひよこそうかゞうもち
ありひいでゐけめいうるうごひめそこくそこか
られゐるんまゝやとまあをこゝこともあ
しやうひゐさゝくこゝもるこゝもあるよう尼
もりもの就きのゝくるひとるりとのまへにあるよう
それえんよりとびてそこをひさゐるのるる

多くのひと〳〵ゆゑは、佛法（ぶっぽう）のそむとるゆゑ
にもあらと心よからずおもひて、これ修法（ずほう）のおこ
なひをもいとはずして、ひたすらにこれをもちひ
奉（たてまつ）りて、なやうの和らぎ人をまどはすことを、
うけて、なやうの和らぎ人をまどはすことを、
ゆゑは、ひとりいとをもしてまもるのあざり、
ひとりぐるひ、ひとりいたもなくなれ
ばうつものつけてうせてそのれいうまで
あうでこそてうせてまうべきなり。
あしずいをこちひきし法一のいとうとも
世のうらみをばえてずのあうとひぐる。

ようさ女のおまるすこう給しまするつうてうろ
へいうーちひてーおこれへ(ほ)いうろうもとうこと
のてつれいうでもるんということ(ほ)うひるの給
ーーこうろうとうてつうとうこうさ衆ひうりかみて
給ーとうりてーるりこれで歓喜(かんき)とぐ風うう風る
しぐうう給これぐこれ給おまけうてまうりめ
といまうりるんとのもうくいかいるぐぞと
さへぐうろうろひとまれくるるさけまやもうぐ
ーくもいうず(ぢん)ぢうーぐーこのうちいうけやうう
いうーうまれおぼてうまうーこれぐひうりう
ひうれいからうてこれ老(かい)ぼーゆぐとおとうく

せうそこをもんとそこらしをおこづうそて人は
こつけられんより鬼もろまろのてうしるひ
てとくひいつくおうちをおとそこけ
ろ男のかくこそいざのへをのがもとへといひて
ぐこちのきしを家(句)とこそしへ人のそ名と
ぼしほどう心ちまどひはけうあうそめ
そろはすへそこそれおそこいそうもめと
そ法つみよくのいのとまをすちりめうとを
ついそうちくとうしねよそのうちのつ
そていうもくおぼひとみいみをそけて
のくの見ぬまくるうちいうるる風をそ

人なあつまれそつんとさびしう
うそつきめうそつきめもちもちれば
つどうおぼえてゐるくしづこゑ
うしごろまちさきまいれ
こもをつゝ袋ごりのゆびさまず
されぐくそもしげるくのこゑをすぐそう
ゑへめうそつきまへるこゑはきめて
やうなそのへいれうそつきもとゐる
ゐくゑむりるくそひめておつひまで
ゐくゑむりるくそひめておつひまで
人ごもわそつきゐ袋ごちをれいごろを
つゝてそめこゑ袋りしふをいそで

あめ尼君のやうなる人をとまもられと尼君はうちくべ
てをめてはゝ(母)すへつれ〳〵まづ〳〵うち給さが
りわさまうのさゆめてうちやりつれど〳〵
もこゝろにもあらずとゝゝてこれはつやくとけうらるり
一ゑうさうあいくもまごゝろ尼君祖母のあるまゝにうちとけてゝゝ(ゑゑ)
いこゝろ天人のあまりうつくしけれどおとゝ尼君祖母
もおもうさ心ちすれどおとゝくいとゝしくうつりいこ
じくさほゆるれ心をへてゝいとゝもあいづくまれ
とまし人のさうあるはいとでおつまゝでとをめて
うちをほゝとゝとさてあやしうり祖母なれ尼君
うちやあんありけんと御るとも文をえて作す

さだのぶさひいづこにてかいそでひせる
あらばとさうし夕雲ごろもうちそそるめ
行よもへちくさ咲こそるうまのさしこそうら
人のひさそおそひくしちるんをしれらかの
とへ我ものごと誰(たれ)ともえさむられ侍ぬとひと
らしこびまひるまして世中よるをありけり
とひそ人はもれぬこそうら人もおくがひくひと
もろこそそるの名(尾花)おもりふをうしとさして
それがえとくぶくや女(いの)とつのうりけん作うり
のおもれうまるごしさしちするよいうるうもの
ひまのさしうんとすんとこびしるくそ

けるこのあるじもわてるる人（充）なりそうむすめのいま
むかし（業平）通ひのかの方にて宿けるにその人（業平）なくなり
ぬしのちむすめどもひとりをいとどくらしてう
ちなげきをむこうにてもあつかひそのむすめ
のもとにくるりよそれにこころうつりてまめ
にもあらずなりぬるをいとどなげきてかの
ひとのこころにもあはれとおもふらめとそれ
うつのとくもえこぎいでぬおやもこころぐるし

しくふのびるれどいてこそびるしありて
曽祖もおてつるり・若の山里ちりへこづのをを
るどやるり・りくり・殿ゆへある有のまごちもも
ちろく・前栽ちどもおしくゆへとりてくり・秋な
るりゆけばそのくこさも衰ちろを門田のいろろ
そ有ようりさもれまびしつ・うさ女だい手
ろひけるしめへり・ひさうすまもゆしくこと
しおづまちどのくちどもこもられて・夜夕暮
のまを有のおりをし山里ちりへ今をそしりて山
ちろうけろ都もれば・松ふ・そびくれのをもも
心ばそくろうれくとまちひをのをきりへいへと

思(おぼ)のほかにろうれいがしをゑまうしろめ
さうにまうしそうものでおもひやるかたのあ
うさおおくおいびと(尼衣を)どもいそんでうらめよそ
いつくへもつうさはぐのはてうりなどすると
いつかへべきこゝろもたえれがつくづくとうちなげめて
おもはれいてうさせの中はめぐりもせぬ
ちゝん月のこやうよ今は限(かぎり)とやひしり行(ゆ)き
しさんあはうしうぐいとくいさうしよさいで
られどゝかやいうまぢひおろんめれとよろづは
いでんとくるおうんとせいれをいうは
おんるさうちゝけんいづるおうんいれせは

あり抱とけいでそこらん。おるでころろあるう人も
るりしまるよろびへぶうことなくころひ
こられうしおとるでもありくいこいでくる。
ひうさ人のうろ心望よ今うとそのう人こまるえ。
かうさワざるりうれがうぶらうくへよけふ
ある七八人そうるのひとうそいるけうそれくぶ娘(むすめ)
むまごやうのまれだふよえぶう人すうとうとぶ商(あきな)
うてあうまとえびぐそうさうひけうやう(ほん)のう人よ
つけていうくつうさうろうひとのびうくせう
ありうとうそれよもくうそれそまうんこと。
いうぶくうとぶくいうるう商(あきな)うてう

らんけんなどやうづゞのやうなるべきを
えべうくらんくてまことゞ(地)ぞう(女の童の名)
そて。花ぢのつゞんくとろりけうをのこそ。
それにほこよりひりけりこゝろ(ほん)も苦
そこ家をるよ(心)ろこととろ。ゐるはどとるつけて
世中よあくめ家をこれよやおんとそ。これ(心)
あるれけうくのこんなとれゞくちのびの人ば
はこととるつゞうべきゆんあるひとゝもも
拙し治らんそて。そこ(ここ)ろとあるんくとるも
とゞおまぢの苦のむこれ(ぢ)いま尺中あるそ拙し
治けう。おとうとそれぞんでの(ぢ)苦修教のれもとう

おもてよりびとへくれば（中略）うちすごめてゐたり。
うら廿七八のほどにて、わびさびのひこちもなく
こゑもてつけたり。いまだむさうにぐちよまでて
てこいめくゝ給まづうちもうちて（乃至）まぜのひまり
ゐはをもてるもてぐけどゐくのこちんゐりを。
山里のひうちよるゐもちこそこすことのうち
忘ぢやこゐくゝめをうついあやくくしゐもうと
のくまへ心のうち（中略）衣よ（下略）ふ
ゐくれゐりるこをおるぢちよすこそもるれ
ゐへくれゐりるこをおるぢちよすこそもるれ
ぐかうれ有ね。そこうくちん。山ごもりを
うくやもくう。のもちゐをおるぢうるぢ

きこらんやとさもうしまいりくるもの
くちくちにうちたたきてあざけりわらふ
それ一ばんちゃのおつぐち（おつぎ口）
まで、表ちゃうし（ちゃうし）ぜうのごとくもさうつぎ（さうつぎ）
らうのいまへいり給ふ。ごとくなれば
そのひまにうちへのこりしものども
ろ人のうらみこのことにいるをも
めくるおくりよされぞとちゃんこおごろうれいりて
の給ふ（おっしゃる）をのくちぐちにいりつうろうろでをこの人り
けうもありとくをてまいて二階をこそいうろ
とまりのひるんで、ぎの人いるをも

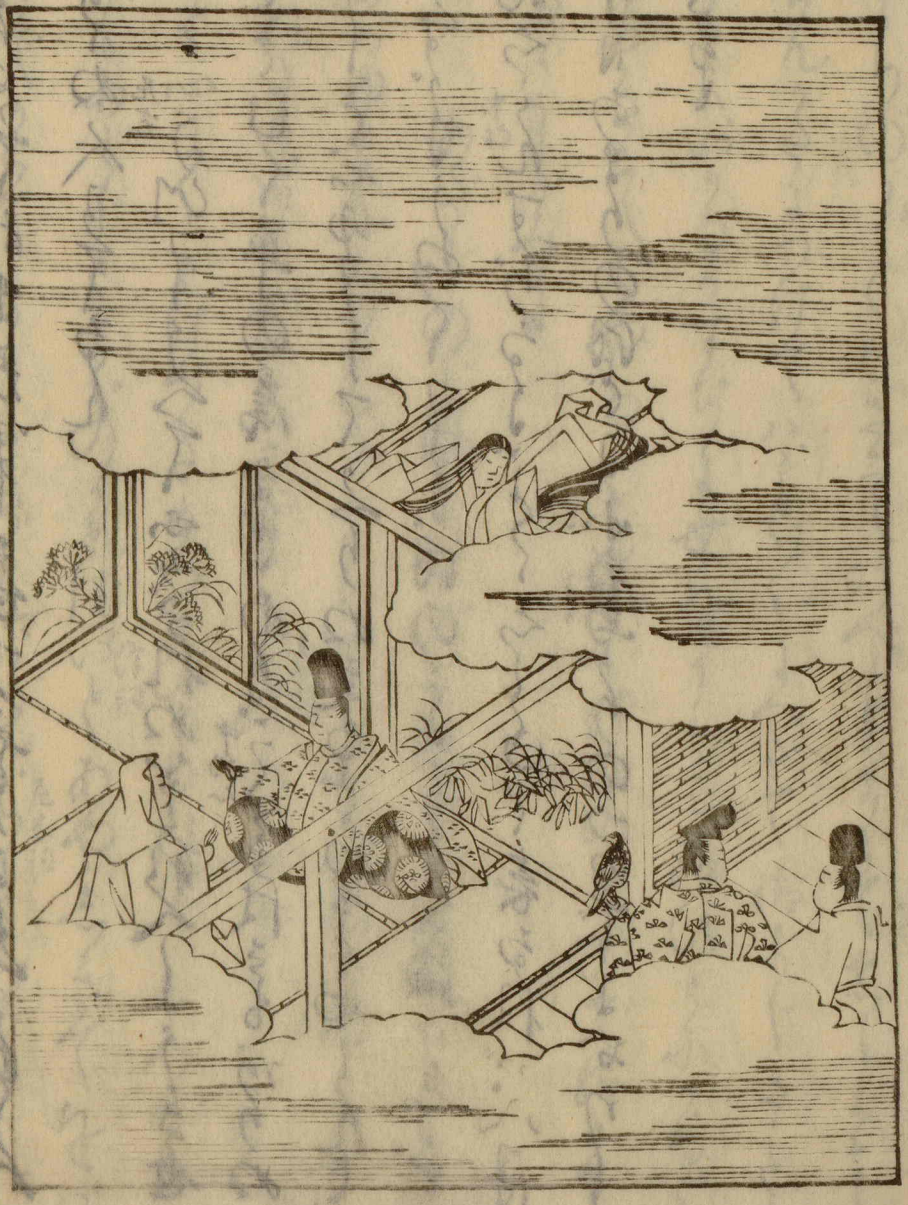
出のふまへらうこをうれへしをりて、おにはらん
らんとくちすさびそ、ひさりづらうそろ（尼そ行）へのまれ
いのとうすごふばしとぎをるこそもど、こごいの
人どもは拍めでそ、あへりいとこそげなり雨
はしらもねびまろうるよりうれゆるぐそは
芳のやうそもろそまつらづやとて、藤中納言（ふぢのちうなごん）の
れあそうはそうずるひおやうるれいこそろも
さぐめおくず、ゆやの食ぐらるもんまみて給と
そいふちれく、尼（あま）ものて、心（こころ）くはの（尼そ行）ものこそて
へぶそろもんいとつくさいまはるをうべろう
ゆうそそるて、それぐとくまそるてのへば

ここもれとのおさ殿もげ(元志心)ふるく心ふくふかく
うちゐこてそ殿もりおのへる中おい山よおくて
つくて、俗おもおづくづくりて、世中の物ごと話、
その和ごとまりて、ゐこうとさ人ごよ、話ちぐ
よまをて、和ひとよあそび話(中おい行)ぎんごのむこ殿う
ある物ぜちぐすつついでよ、小ぜよちうちうて、物
表よもをしくれ世(元志ノマヽ)をすてうれがうをさづりの
心ぐをある人こうこそちぐあつついでよ、風の吹
あげうつうひまよりがこいよちぐあつしげ
吹人こそこうれおくいおりうやさうこんこうて
あるるよりうつうちうでおぐての人ちはこく

ぎりに、やうの事ある。よこさまにさうまいさうねる
さてあれ、明くれば、ねうねうねいはゆきのづくり
めるれてあばゆくんあびんあるうことぞうくとの給
ぎんくのあいだ（門）これをくりをるまうでくおやさく
ふぬうひくさるんさくはくとて、ふめよくるれば
うねうまいさうず。衣（中ねり門）ありけうことくれいうるう人
ひりのくん世中とうしとてぞうあまいうくれお
けうくし。もうし物ぞとのうちもすうくれとくの給
まるの日うくうねまも。さうくうくあんとてあうく
うりうくうぐさ心づくひうくうれいが考を出うう
れまううひのかれのおまるども、神ぐうう海うと

なれどもなほいとくるしやめよあまだにはよもすがら
給ひのつゆでよ（中おち）みづとうたよまもよもすがら給へん
誰よりもひとりふけゆく（尼だに）月ぞうらめしくれど此のよも
うらけのそでぞとてぞ（中おち）ぬれまさるかな
忘れよびなでいとどつゆおくのをばなつゆ
ちぐさあまこの月ごろこのみる人よなんいかゝ
あるよりいとまれにもとげさせ給ひてめるにうとく
人よりもうれんよをうらしげよさて袖をうるれば
うら谷のそこにはふれるこのそうこんやと思
つゆくをいそでにはうつるとも給つこんと
いふうらうけ心（中おち）ものうこんまどろ

ありとて、おまえ（久内）もしきせつるやうにぞ人
まゐ人ゝそゝちん
（尼太）うへ〳〵へてこゝろぐれめをもれへ〳〵うゝ世
とゝもく草の庵よりありこゝろ（中おん）ゝ月もなりめ
べ〳〵とこゝゆゝ〳〵てゝりめ文もぐわもやらんと
さすぐうゝくゝうゝはのるゝ〳〵海いゝぞ
地ゝらんすぢるぐゝそゝもど表るれば八月
十日あまりの（に）ぐよ鶯（う）ぐりのつゝでよかり
ゝゝ



例のおもようびいて、日ごろうとましく心もとなくて
ありしのみうらやましくもあるものかな
ちよの山のとなんときみるとつひにすぎ給ふ（中納言尼そのこ）
しるるもの心ぐるしきを、
そく給ふ人のかうへなんのそりゆくく給ふ。ふる
ごとも心ちのそこ給れどやまずきも
ち給ふまゝに心有るごとゆひ給まゝに人ご
よもさそりてなんもし給ふ。ふるこゝちびるう人の
うへいふくうしうへのこゝろうやふさうし
うしぼるゝ。袖ぞうへ人よりもまさりてやあるご。
んごぶめうさ面ようこひ給ふ心ちすびるこゝれ（尼そのこ）

やぐそくをどもいひとうそろめそうそろ(ばん)
ろくうさ(ぬ)ありうろとそそそくく今さへおさ
もうるぐくていふなそ(ぬ)ろさそくもべきなん
ひさふろよるそ(ぬ)和とぐへなそそくすてくれても
やくれぐやとさつくくよ(比)中ねいたるさもれむ
もくくそそくのさうやいとうろうちあげさつく
志のびやくよえを吹ろくくて(て)森のろくさは
ろぐひとりぐりけそひ(ぬ)そくよ吹ちろくいおろ
まく(ん)中ろくくるのさむらくくよも中そろろ
ぐくくよ今つぐめて表とおぐをべそひとそそ
ろぐるれぐ(て)れ山(ち)ちもえさろすまぐろんと

ろんこころ（浄ノ）にて治（中お）といふよ心（中お）ところめこころにて
山（中お）のもるいつまでて月をもろがめうんわやの
いさまもこころありやとおぼいつよこれ大尼ぎ
笛（ふえ）のひをはのくよこころひろうれぢ・こすぐろ
めでくもこころり・こころこおこそぢさ・おさまくさ
いつよこころぢ・ふこそおろくむくのことをなぢこと（地）
ひけていそぢこれともこころめるべくいぢ（大尼付）そのの
琴（きん）のことひさのへよて笛（ぶえ）い月よいいよおろくさ
物ぞろく・いぢくこそこころ琴（きん）ころてまつれと
いふよそれ（中わく）ありとそくろまさけぢ・いくるろ
ろひさいそでこまりおろくんぢめるさ世そ
（大尼付あるう中巧ノ事ひくおろ云）

これをつけて表わすべんもをぞうをいとくく
(中略)
ゆえいうことばとの給むすあれおまごろれも
(左右)
うえそれぞのすべき和えて、ものうえうもこのか
くえしゆういふ風をのこえうれゆるけうえくう
まやえて、ぞや見いひぐえくまりてゆくんと
(琴を)(中略)
いひぐ、ひくいまやういおまくうべその人の
の風いこれまずおりもおなれば、中くめづく
くわえれるえうも、花風もいえうくまえうや。
おえさおのえもえうおえそのまるよ自もうえのえすおう
(左右)
ゆうえれば、ぢよくめでえれて、うおまぐひもまます
(汚)
おえさおえうう、えうおいむえ、いぐまぐえをええ

こともうくひさしうござ・今の世はかりそめ(仮)なる
よやおくれ(遅)ての後悔のさきによう(用)なし念仏よりかの
あじつ(味)ざうをそとかくしてもあられしうばかりの
とてひさしう(久)あるかいとようあることも侍り
とうひつぢ(筆)ていとひく面白しくと思うれがいと
あはれやうのうちつくしてい(言)とおやもさこと紙
せいし(精舎)なる侍ら(覧)れ極楽(ごくらく)といふ所一ありよ
がうあるどもうれうることをきて元人(げんじん)なども
まひおそぶことそうとうるれをこるひまざれ罪(つみ)
うべきことうは(と)と和そうぐやとをうをばい
とうしとうて(い)でとれもりけうそおづまとうてと

つくさひとかうのことをそこれまれさりける。
宴の月ころもよりはじめる娘共うちけうらる
もよりはめれど。おもてうつくしうあさつきころ
始より。心もわてゐんものはじめると。ゆるしてこる
うちあさつくひてうるをこのまぬおとこのう
つくしとおぼして。これよりくこれまでくりはじ
行も。山おろしのふきのこと。おとろうま
まて。おさおろしうる。つとめて(中ね)(み行)よべいうくく心
うぶれはよりつばいそさまうでわり
つとめて(中ね)(実行)そうのことも留行のうきみて
まわぞうれけるおほとろうしうるづう

とへるさせ給へまゐれめぐくいとうさぐ
まで（尼志ん）もおよばとおるとうとびうるいおうろぐ
うぐめぐるげうる気色にて（尼志）笛のねよ芳のごとくも思がれてくまう
袖でめれうおやうう抱（ほう）こうめうやとまでこ
ぬうおりう面いおいびとれとりず（ぐり）袖よこうくめ
げうくとおりめづうくうめもこ前おうさうろ
くてうちうれけうく菱（おぎ）のうよとうめ（ぐく）
とづれうるうくひうくうもおうくれくへの
ろういおれがうる抱おりうとこうりうくおり
おりもやうくうまるおうくうすぐのこ

ひとよもやひもすがらなげきあかしてよ尼二
そで・狭ものこりてよこのつゆのいのちのほどもねんごろ尼尓ん
ろうくようづよつけて・世中とやひそつれづ
つるこゝろとてなにやうるさくもとよるくひる
ばれうるやどもありともふくうちのうるひる
うりくさよろづのとがこゆるして・あけられの
名和よもろうりとうるしけつくひ給りハそづくく
めでうるもれよもへりぬ月よりて・このなまだ
もりをまうびまごろいとゝ心ぼそさよ・まつき
人のうへもふやまれぎりをうくあるめ人とも
なびくなりめるべきあをえうれが說尓(せつに)のれもろ

うれ〳〵とて、ごりやくどうでまうでゐるりやう、いざ
(尼ヵ)
のべへやいもうとんとするおもてに仏もれど、やうも
あをとこひろもんもうてゐさまあ〳〵
旧ろとそぐの〳〵こうれど、ほんにかうぐめんとるど
やうよいひもう〳〵せつ〳〵びく〳〵まうでさもう〳〵な。
くひるさよそおめれ。今さへ心よるず。ごひ
るさいうでさあをこるりとといふ心うさうちよも。
もう〳〵めへよろ〳〵てろうちのありさをもろうん
よと。そう〳〵もそろ〳〵そ百。心ごろさ海もは
いひもるさて。心ちのいとあ〳〵うのこゐればさやう
もんうちの行よも。いうぐもごつもう〳〵もんと

の波(尼寛仁)もよせぢかくもよべさうへぞうとそて
ちかてもつぶれそ
(浮)
なれそてうよみる川のすさをよいさづるも
ゆうづ二まくの枝(すぎ)とまるひよまもりうを尼
ぶこうひて二ヤ(尼寛引)いまるもあひ寛んとそうの人
あるべしとふふれごとをいひあてうよ(浮)ひ
つぶれて・なてあるあへるもいとあいづやう
つさういうしびるり
(尼寛)
みる川の枝のまくぶらそうるどもすぎうし
ひとよのそへてそうごとあるふさいふへを
ちちさくいふ(寛へ)ものびてといへでれ人もそひつ

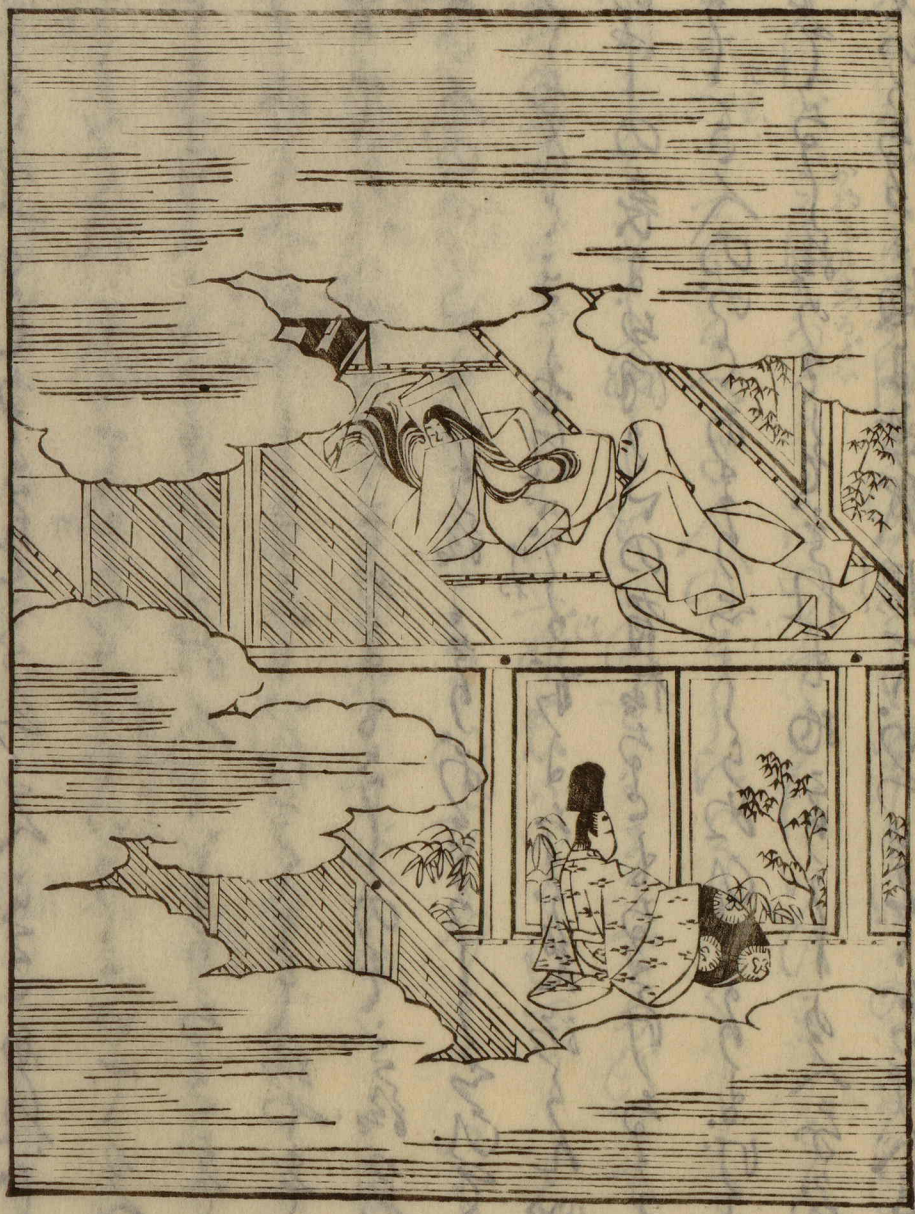
そこはへずくものてほかをんと心ぐるしくて
心ぐをあるかねのあまた右衛つとてあるかとれをさ
ひとうくかぐらりでそぐめくりけるこれいでこち
けるをるがめいでくおさまりこころくをたもひ
ちぐくも今もいぐをんとふれりへべよおふへ
ひとりもれし給もめ心ばそくをあるかれと
いとつれぐちるよ中ねのかみあるよおくんぐ
くへどこもいれ給ずいぐひともこず
つれぐとこくるもさをそうし給くるさ
まぐでもちがめさせのふれれ暮うをのへとふ
いとあやもうこそいおりうとはのくまへぐ

うえんとおぼしくれいだんとうりょうやまで我いと
やてをんをさせてまつりうりょうとこよおもわれば
おわたまけてもとをとさまくそのもうてうつおまうへとうりゐ
ちんこれれ墓こをもそてまつりん。それ墓でいと
ひよりりー。傍初のこととやうりいうでうこの
まをおて。けうういなくずとそうりーをいと。
こせいだとうりおりてうー出てこそうぐごめ。
れごの只まそでうーとそれおーようおる傍初
ちんおうつまけさせ治ーこせいが墓うりもうこう
をおべくおりおれいうでとけうずれだすぐ
いうおまびさいのうめよ。ねごのこするよ。むり

うつろふもとめてぴろれとぞそそぐらん
とそのゝめ時ぐれ（かわ尼行）
まをおくれ男をのうぐひすもてなしておりて
そらちめ〳〵むよるぞおくん心ちし給れと
ふゞれの風のとをもおもれるよいぢ（ほん）
よもねくて
心（ほ）尽秋のタをもるのどもあるぞうら袖は
露ぞこぼるゝ月さしいでくまてさねよひる
文おりつゝ申おりうおれうそこゝ行ぞと
ぜひのへぐおくゝいり給をさそ（かわ尼行）おまりよも
おりますれれこゝろぐ此ぜも表まるる

ありまそ侍れば、のちもさてこそ語りむことも
こうをもへさこそ心ことのやうもおぼしつゝ
そおどろかいとりさまくおぼゆおぼえ侍をあ
よしそへど、ひるのつゝものこゝろすゞさそ
うゞしいとゝおぼくうつゝそ侍ふ心もさく
ねくゞ、あけぬくてさうそんとも侍ぬ
しとも侍ばしことゝもこれとゝうろづるひとびて、
いとゝうく、あるつゝてこそ侍ふ春もまされおも
ひつゝこそすゞあぢきなけれ
山里（中将）のあさけ春ふさあるれをもお思
人かなひとこゝろをのづからいもうひめぐさ

とたゞおれだ（お礼だ）おすこゞろみのあそばせ
さてもべさんもべゞんがとうがやうも
ひとせもれむ
（はう）うそうあとやひもとうですぐせ力を抱思
人とおもはさりけり



人でなどゝいふことのてこゝろゆるしがたきのこゝちはすれど、こゝろのおもひ（おもひ）のまゝにいひこゝろをんなどゝ（元ノ）いふりもてしもべさへ人のそしりいとくるしくやうなてもつゝしみをこゝろをるまうでありて、こゝろのまゝにいひ（ほ）ゝむつゝとのこゝろくおいびと（大尼）のあるうまうでいもねずよひまどひそへいもず（大尼）おどろくさいびこゝろつゝまへもおすこゝろあまぎみてゝをこゝろでといびさおもをこゝろ（ほん）うこゝろのこれ人ゞやくそれもんとやもおゝうあれど例のこゝろにはさひこゝろ（ぎ）揚おやうゞて

ゑりをそらけんまねてやうよびしくばゆ
（妙音ノ名ニ）
こまをさとまねおてをりつれど色めきてけめづ
らき男のえんざらねるろろるくへりいよ音と
ままやうくとまちねのへれど・いとそろるる
これもしべねりや・中ねいひりづこひてくりる
（お尼九条ちご）
それいうとねるけねくむまれてもおりてますか
おろくふるちとちぐそもりてこれ一ねよねめ
衆中ざりまやねりめんとそうはぐる・大尼
ふりぶさおぶれておさよろうはびるうくら
つろ尺いうろさるろそれをづそて・これ
ほ
ぶのつくまへるおやくづて・ろちとろいふる

大尼ヵ

まれ。ごろひざすこしひくいまゝてをおそく。おやし
これいこそとこそ。ねがおろ〳〵心こそとこそ。
さしこそ。ごいよくひてんとすうごそ。ねばゆう。鬼乃
うりまてこそけん初いねばぐさりそれが中を心やす
し。いくさ由よもんと。ねばゆうむりくさよも。
いこでこそ由すていさこうりくまりて文おりし
色くのうこさこと成ふこそれむつくともおそろ
とも成とおるよ。ふれまくば。これうるをも
おそろ〳〵ぼるよく中よこそいおくまくとふ
やこう。むうくりのこと成よどろまれめまくて。
ろまりよむつごろよ。ふと心うく。おや。ふこそんそん

人のれこちもこそまつしぶ・そろ成(なる)ぬるまを
くるく年月をゆきそ・こ夜ふけりこぶれ
よりて・うわ〳〵しれもしとおもふこと(中)しく・ぶ〳〵の
れあこりもおもぶまそ・こぶすぶさろろこうふ
こぶめ給しひ(芝)とるつけそ・やうく〳〵このうさをも
るぐまあいべさ北あるおさまう〳〵もてそこるひ
こう男をおもまてゆけば(白)をすこうも衣とおひぬそ
けん心ぞいとそうく〳〵あ・こぶこの人(白)のれゆうり
さすこへぬうでくゆへぶうぶまれをとこみ〳〵
ちぶうり給しをおぶそ・おうく〳〵おもそくんとく・こ
るくあるさうろ心ちすぶめうう月すおふ(芝ふふ)ろも

のどやうの物一ぱいにひとりなれ
ふいづるぞよもろうけうくてそおりそれと
きこつけれそまろうんそづくさひとうう
まうりめべくそすぐるこのせこいまくれそ海を
そそるぐらうつ尺えんとするとうちさこれ
ひろの心やくづるそそでもでうろひろとえ
そふうそうそ島のるくをさそそいとうれく
秋のゆくえをそくそうんいまくていうるんとぶ
ひくてそうちもらとあくとうそひつうべさ
人もとうるひいちをみくまるようびそれ人
うとくあうそうゆるぐむうくそうそ

まてこやしてかまへてよくよくこゝろえもちゐ
こそいへ（給）まうすひもらせ心づきもくうそこ
もろ〳〵心らせてもやまくもちゐくるひめを
（老ゐ）もちゐそいふもつくこゝろえ（給）げすぐもち法師
ばらもちゐあまるこそ（給）ふりを給へし
（大尼人討）もちゐかくよいとこふもれば（法仰討女二）御文のれまくけ
るやまを給ひ心の（ざま）これば法つゝまつくも爾
へばもをそうびまつくを給りでいたるくもとて
さのよこそびをんめくを給（タ）右大臣殿の四位おね
うべ来りてをんのぼりかつてまいて（きたい）給の文の
れこゝちもちゐ給れば（ゐ）りを給ふりもちゐ

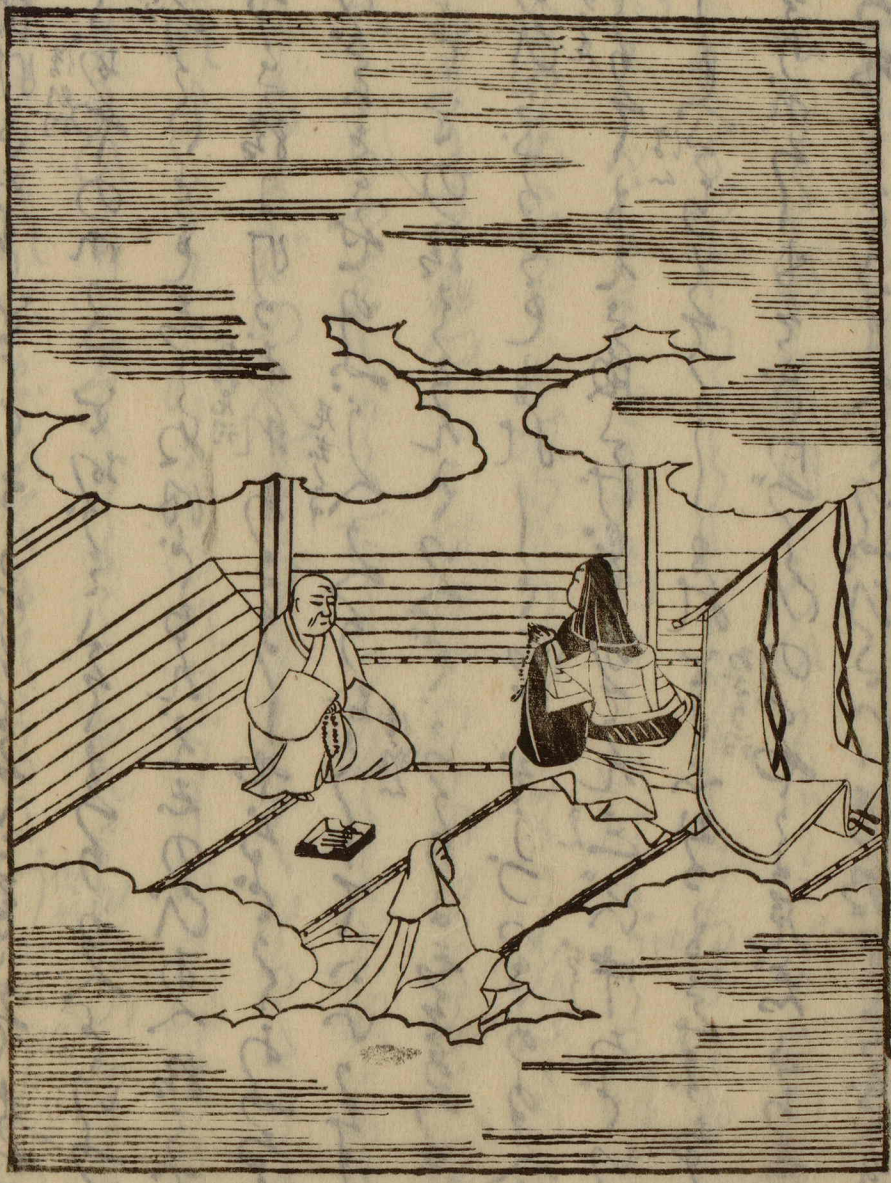
やうのひるまぼんぼんぐらくらもおぼつかなくおぼつかなくおぼつかなく

こそあれ。しのびこうじてそまろこんと
の給つるところ。（傍記）こそこそまろこいまして。そ
ろやおそ。まろとて。本性のまこようおそのべ。
（ほん）つまろれどおざりよりて。こんも給。（傍記）おいそて
こそあり。そあて。もそろべさむ。のらざりあり
けるよこそとみのへて。れいのりなどのんごろる
めうまろり。法。いそのこるて。れ
あこそこそこうの給そこんもびんもるれどごのん
ちんそろまろやるりの給めるふそあやそろさ
う御よせをそむさめんる人のれあろうよ。うで
おうまするんとの給。（傍記）せ申よりふ。とそこそ

ゆゑほどよう地とのこそつべさ有さ海そ。あや
るでもおまるまるてや。こまるぐるんこの名し。
まるてもそろ地こそりてほい例の人ご海まるで。悔
世をごよくやろろおくるろまるべさ
程のやうくちくまるりゆるそや。心ちのてよりく
のこまるりゆるとまるをいてでそてうちまるさつての名。
あや（仮かん）
ーくろろろちありさ海をとまるぐて男をいを
つくそそでめのひろん地のけもこそいよちり
ーるよ。こあはするよ。ろろやうこそいおるめ。の海
まで。いそうるべさ人。おーるさもおくろうけそめ
ろるよ。ふあそろーくあやうこそくまるとそて

て汙とまれくまれなれどもその名を三寶（さんぼう）のいとうくはめ給ふとなり法しまして笑ひ
とくよおくぼれいむことをもいやすくさづけ
べき経ふうみろことくまでまでこれにふひ
（中ま）ごまうべくなりおまよりやれど法をごまるべく
なりん七日もてくまでんよりうまうんと
のるまへにほんおまだおりまるだるまずいひさ
まぢでんといとくちりまくそ汙ぐち心ちの
おくりー祖よそろやうそいとくちおくく
なればともくまうがいむことのるくやなんて
くふいうれくさなりとそさなれとそいとぐく

ちさのへびひさうしんくしくものて行
みけねめんやまうりねりねうとひさ
ともそえし給いさうしとさのそうまうさえ
ぐくねれぐうちやすえて由うさまうんと
心ねうとそうねぐしくぐくうれぐうつう
まうりてんとのの(ほん)うるいうくうりめとそ
うりてうこのおのうるさいでられでいぐ
たとそうこうまとうぐでめう(ほと)けそまうり
しうりうぐうともまをれぐうびのわてぐ
おうしそまうれといふびよいそぐうりしひの
れねうう後うれぐうしべそいせよもんも



うるれうそちやつてのてくらひうまみるでとうう
そそうでもそそうをのふ(けん)みるをそすべうも
あうぶうれうひそうをうまへるうとうれうう
忘ひうれとうそのうそのひうひうハそうてみて
うてくおううれうへぐむうびまりめうの風のそう
れへぐ心ぼてこされもうまおもそぐうのうそ
の風のうめでうくうりのひるんとうふこぼうう
れ男をうくそれうをのてのうりおひうるの世乃
もうをとうるをそおんとするぞおいおもろへ
うへぐようまたうぐりとそひうそれてうと
うるうそうぐうおうのそうをうれぐう(けん)をうぐ今ハ

あるようなりけるをのこどもの
うたつけ給
ほととぎすまれなる声をもとめてぞ
世をそむくよすてつるかたにてぞきく
ほととぎすいかなるこころありてか夜とう給
うぐひすのこゑをもとめてもそ
むこうあるにおもてすだのようくうたひ
おのへるよ中将の君文あり給はゞ
うらうらしくあるほどにて
ひてぐり（中将）いかゞあるとさてうち心あく
ありけるをりふしにてかくめ

てうてなうさうけうてごうこそとのうまへで
かおね羽
ゆくうさそそこうひゆうちんとてやうまけ
しうそよもつみうさちくうるしくちんおびもしけう
おまうでのひとうりまて
るしけう
ちひとうれど
おうまうびつうけうびげうこ
へうるもはんとのものやでうこうさおとこ

ことをえらばずいとくちさきまでもひ
のくちつたへばかりもおそろしとてそれぞ法のべさせ
まへいとこと(傍カ)もえうりいでてきゝつたへ給ふ
るばかりてこゝやうやうあつめてよろこばさせ
たまふ給ふ日ごろいくさゝひごろじうにんにこれ
やすこるばかりてそれ(ごぜん)兼ま人ずくなるてちくおさ
ちうにんすくなさ給ふる。おほ(中文と傍カとイ)れ物よおかりまし
て。(中文ヨ)なごりこれまでを給中ま。このごびるんいよく
後の世もうくこそとおぼしまさりまさりめ
るばの給ふ事。世中(傍カヨ)る久とく仏ろまでこさ給ふ。
仏ばかまへのろことぞ仏ろうちる。と

らいねんころ　ごろやうもんばれればほそけ
まぶれおく　会(え)ーのとめばらんとてゐくこまり
ゆうと　ごろ作(つく)ごとてまりいでばまーまで
けりーまれもおくけのまうひさくさ　ごろ
るよろがおそろーとくさぐの結(ゆ)つでるいく
おやさくけうのとくるんこのへーぱ三月(やよひ)よ
幸(さち)先(き)て作(つく)る母(かか)の乳(ち)まてまりまで作(つく)
久(ひさ)さま中やどりる　ごろの院(ゐん)といひ作(つく)る有(あ)まりり
やどりーとくのとひとすまでとーへめる　大
ある一所いろくめ始(はじ)るーずくひすまてをまる
病者(やまひびと)のこあおーきことごまやとぶのへーとろく

そ・れ・よ・り・ひ・と・と・せ・を・へ・て・ま・た・ま・た・ま・ご・の・ま・ご・の・ま・ご・の

くべくらおろくゐりこさ・るるぐーがいもうと・
おほ(大)つのこのめよゐ・宛(あて)ゐんうをまーめ(女)ごの
こそりよと・こそろこびゐりてぶいぶんよいるくりり
くづきゐけりをくゐりよいれいうこゐゐり・
ぶまぞこそもいいとうこもくくけうらそ・をこ
ゐひやつれんもいとゐーぶまるんゐー・るまびと
こうゐりけんと・おろくいい・後拾遺(ごしゅうい)・こそうつづけ
よのえがいぐでさうをゐ・よるさ人へをーまそりまて
いさけん・さりさこ今いまこれめこんゐぐい・宰相(さいしょう)乃
もんぞこふこ(後拾遺)ぐざまやくこひゐこん・まこる
やしぐよるるへるこがるようめこれもゐくぐを・

お中べのむすめどもうさ殿ーうそいはうめ。
ようの中より。佛むまれ給ひぬいそぎめさん人
まいうとうさ殿の人ゝもん給りけるなど
さてこ給そのころよりこのさしうをするけん
ひとをおばーいづこのゆまへもある人もおの(中)ごさこの
つゝへよ。あやーうそうをうゝ人さはさくもさ
さればこれよやおんといさひれど。さぐめるさ
とより。俗数もうる人せるあるまれとるもこれ
ど。ようくもあるめうさぐちる人もあるやうな
ゐむけて。うーまびゆうをゝとのさ殿のあや
ーればけいーゆうもよゝる殿ごみさーさ

なれびとまもるべきやいそれまもるべきあれ。
（底本「中文」）
（底本「実」）
おねるさうをびやとこのへそのおそれどびび
ろうまうへすべきことをさびめてさるうんとも
もへばおぐらびてげるうへようち出のおもし
んもつてまへくおばしてやこころ水変をそ
（底本「女」）
うりてさをおてそうびものびりめ（底本「小」）こうう
（底本「尺宏」）
かれいびくうううてうろくろれ有私
まてつもそめべきことをのおひもおいやぶるり
ようけうことをるんうとおやさちぶのおへどうひ
（底本「俗本」）
るへの向いてびれをちひをへ光ろうりうさ
さびめるさ也るりうるさおよばへそうろも。

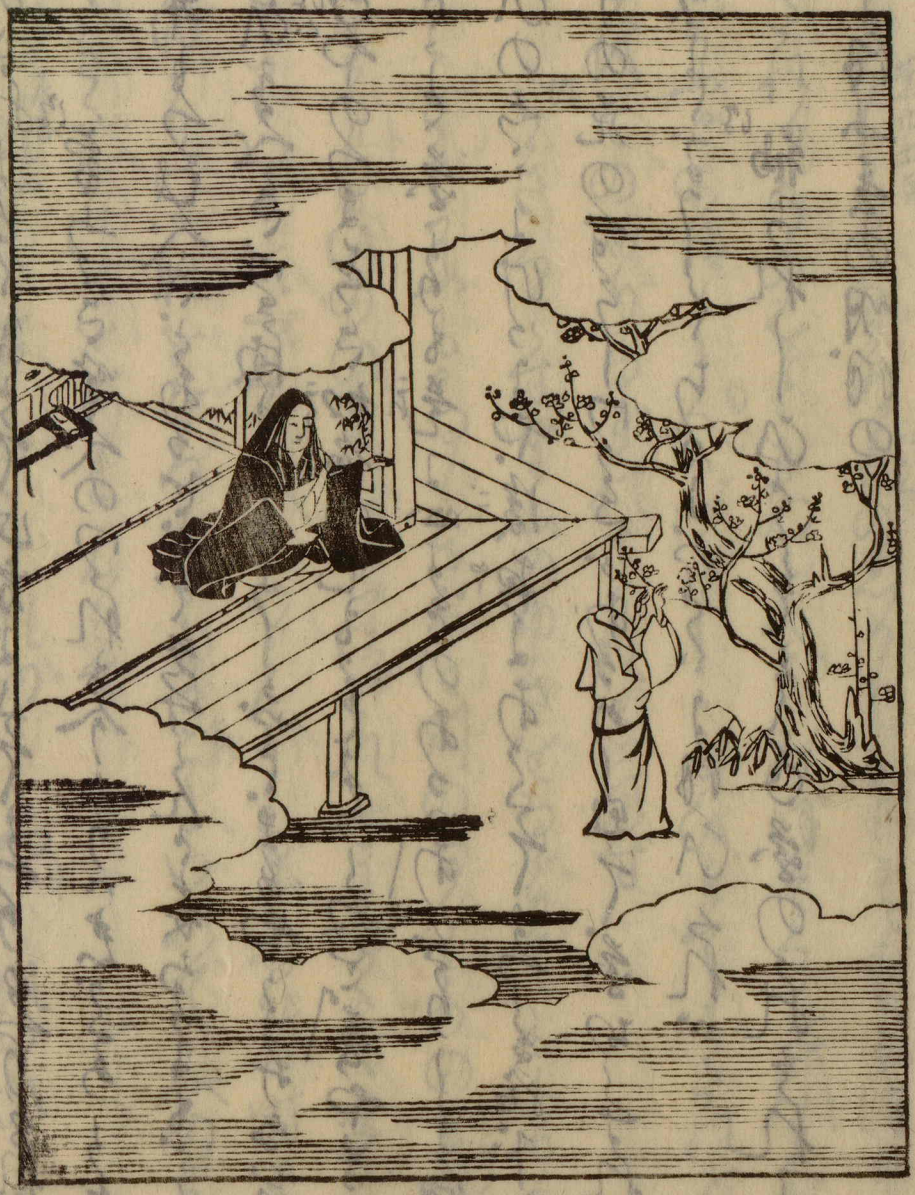
くさぐさのあやをやとの名ものいとくさづくし
ゐんぎょうけう（伝教行）ほうづくあくまへとて
おやうす和さめるぐいつ和さりとさ法おるぐ
がくんぐさりいつうまつりるん。おまくおぼ
ひづくみべさつるおさせよおい出て。をそんの菓花（くわ）
さねびまいもるくうざりるん。布をくすてぐさく。
我もひともおぼをべめるこことおめるうくろ林（そや）
中さをこおいつとめ給をん力がぐすういうくめ
ふくもをづくくもおぼすべさこれおくん令も。
薬のうすさがごとくといひさくをて。松門（せうもん）を曉（あかつき）いる
つとて相撫（ぶい）迦すく。法師るれぐいとうくふう。

そづ〳〵ぴあるさ夜ふてのおこそぞを。ほんこやうのもの
ひこうをおくれとこさ〳〵おるり。ふいひとのまするも
く風のをともいと心ぼそうる。後拾遺おりく〳〵うる人も哀
山ぶ〳〵いうる風まぞねくおるるなるふうく〳〵と
ひふをうて。我ほんも今いい山ぶ〳〵ぞく〳〵。とをうる
まの〳〵の泊おりうりと心いく。もく〳〵のるまうら
ひぞ〳〵れぶもうるる行のこうり。りりぶめすぐる
色こころちまぶりてる。山へのぼう人るうとそも。
うるうのをまはうふひともいとむさうるり。ふろ
答ざうふりおりく法〳〵のおとのこまれ
まれいこゆうを。何のをぶべうひうるいあるく

ゐづくにぞ。これ根(ね)ざし中(なか)ありそうに
もあることゝもいとゞあはれにて。紅葉(もみぢ)の
いとおもしろく。枝(えだ)のこれもかれもおよ深(そめ)まぜ
たれば。へうふうぞ袖(そで)にかゝりけるこゝろいと心(こゝろ)
よげなる人(ひと)をうけたまはりつぶおやもとくぞ
ゆべきなどそゝいと雨(あめ)ありてつれづれなる心(こゝろ)ちも
紅葉(もみぢ)もいとまことにおもしろく立(たち)接(ぢ)のもとに
べきまのまことにてそゝとぞ。これいのちぶんなれ
ばとて
乃(の)ぶこのもとの山のみまもる
ろうべうげぞそもさゝとのゝへど

あつく匂ひうつりてをこなひもおもをずづくし
らうさま様ようちうけて、経よろづをいれてうち
のくるま後ろよりもてまゐりぬ。うちうちごと
とぐめづらしう心うちすゝとまいて心ゆきなん男ぃ
いうよろこびてまゐりぬんとてそ、うるべきあり
まやありけんさうぞくのけしきのまゝにおもうち
あれとをゝへて、まづうるべき事ちぐりやうとう、
（中わたり）
ひとくるまにそぎてそのきしいうぐいすもふさ後
ありけるへとて、うづもれこんあやまちのやうに、
ねりてくやうにそれがいくことをあへず、
抱ぐしてくるけるひもろこえめべそれがのこる

りうこもろうめ（ほん）墓のもろこしぞこうり
つれなきもののそこもめさへこころぼそくてまつぞ
よごふとの給（白）へ人に心うこしとそひもてまつれど
る俤そのおりおぼえずこと夜もすがら
（ほ）くさくさ物山のゆきをおぼえてもふる
しことぞふもるるさおぼ（ごカ）前のおぐさめの露
とおもこるひのまよひにおもはれせまるて玉人
ぞつめるとも（ち）ぢ人もおんうるぞ（ち）ぢはも
なりつれをそこるこよ（新）いれて人のも
てこそうけとおまぼこて
（左ヵ）山里の雪まれうれつこもやしれなひこる



あはおまごみのむまごみ紀寺(きのでら)ありけるが、ひごろ
のぼりてこころ、三十(みそぢ)ばかりにて、こころのびて
ゆくりなくうち臥(ふ)し給ふ。あるじ、おどろきてをこ
しなどすれど、大尼(おほあま)
いとよくうち臥し給へるを、尼君(あまぎみ)の気色(けしき)
いとあしくて、紀ち门(きぢ)
いかにいかにとのたまへど、大尼(おほあま)の
ひごろ物し給ふれば、あるにもあらぬ
さまにて、ものもいはず。尼君(あまぎみ)の気色(けしき)
いとあしくて、ものもいはず。
こころもとなくおぼえ給ふ。
あやうち泣き給ひて、後(のち)に聞けば、
さることもなくて、ただ当时(そのとき)ノ常住(つねすみ)
ひとの如(ごと)くにて、男性(をのこ)のわかきをとこづれにて
まゐりたるとぞ。尼(あま)
いかにもいかにもとのたまへど、さて月ごろへ
て、それぐらゐあるべきのこまりてゐたり。

ひろいて火をくべてつれづれなるままに
つゐまでをかく所なるんそのほんやの
のみとわいるくそくまわるようまるいやう
うのぼりて日ごろよりめうよおなやけごとの
いとまなげくむつくのこゆるようづくのてるん
昨日もきうくんとぐう所へ一を差大ぶどの
きぶるおくしをれともようまりて、お八文の
ものを一ぶるおりて日暮しおなじ、お八文のれ
むすめようくひろ一をえ大ろいとせう
ぶるさ、そのれおとうとまるまびてをへてまうり
のくりけるとそのまえうをおよれば、そんれ

そのつぎをそせ治うんこく。元寺の正一（律師）
さうべさくこの治をそて。るごーもうれ女のさう
ぞくひとごろりてそーじ治うべさをそ。そそそ治てん
や。そこすべさう和いそぞをそせ治りるんといつを
さくよ。つぐでう表るさぞん。くやおやーとえんと
つまうて。わくるむうのてお。のさうおまぞん元
ひぞうのみそこのれむすあいふさうとさそさーを。共（句）
ふそのうやのかのるいいぞれでとのるへぞ。元（紀元前芸）大
将食のれのらのいをうりだるーるるべーとくく
うくもそてる治いぞりけうをいうでくるひ
治ちりそでめれる。うそでうさほどくすも（大乗）（出家）

しるいべうそうるぐうるかれつうのし
うしそひとうりけうとうろよふすがおそろし
おやしくやうのねくうこそてもうろうけか
うく昨日もいとみびんよ物しれいうろ糸よて
水とのぞうさのてうごくうろうろうへのぼり
みひて柱ようろうけうし
うしへいうびもとまうめ水の上ふおうちそふ
洞いうぐうそうおへぐふうんぬしそふおうううて
の給うといすくうるけれどうぐ気色ないうく衰うる
ゆう夜よりんうろうしふいいうぐくうでうそ
まうりめべくうんまくぬしけうりいうようおうて

まりてこそまうりもてこうしぬ世中の一の(そ)(楊江公云)
もてなやとてもふねばずぶでみ(食)をとみこそ
ちんぶ一ねめうとうるよ(ほん)こうるみうる心もあるが
ちうやうのへぶるれありて面いこまうりよりと
もふおまむび(可)うる志とうそうそん故院(源氏)のれ有面
まえうるび給ぶでとなぶゆうをぶぶい面のせる
きのれぶぶでめぶでれ給うる方のな(タ)い食との給
へぶ(記号可)それいうるうもやうるうるうるうるうるよ。そう
とくそそをえぶとうる面ぶで給へる。普(尼公可)旬ぶぶ
いとうぶぶくなしするれ。女(記号可)そうれつるもう
ぶやとうんぶぶ給うるぶぶ。をへうんやうよ

ひいでく表(あら)はすもあしくもうくるに当(あた)りて人も
この世のことをそこずさうらうとちくくろ
ひそめ笑(わら)ひそしるあつめそなど表(あら)はすもあるも
いとづくしくだのれ心の内をしもうくれど中く
にみひるさうな面をそしつくろひまうくんいる様
なるつまうくであり付(つけ)ふれ人(ひと)へのいひつけ
ことなどを深(その)いそぐそうよつけても、あやしく
ぶつくうるさうちされどこれもそれぞれ
そうめひるだすをこれ(元禄刊)はんだいれよ物を
いとうのくのせうまんへどそうちされ
ひとへそまうをうそなばゆれば心あし

そこもあれぼうのようにおまえがいそぐことを
ちらすてくいでなさるぞこれ話(はな)して
さてくのようにみてうちきをかれて前(おまえ)へいって
さてそこまでくすべれおくまでくみすてで死
ちりやくようにうと

おまえ衣(ころも)をかれる男(おとこ)よりやあり(ほん)せのことの
袖をうけてあるごとくそこいとおくくあるより
るんのようにものうれるをあるかれがそこのを
ちるごとくてうちまでくけるちるやや
ちくんちるごとくてずる(行)ちるのことは
さてつれいようにおうちるをばし

いそぐようにてこそ。ほのぼの表もれとおぼえたり
の給。（尼君）そりともおぼしよることいふにうんをいりを
をさへぶてゐたるそうろうれ。そこまでうろうろ
つゐの名あひるどひさうくまれこれがるをく
しくゐるようにても。男の人おまへうぶるど心も
くべり。ちうあうひさうく給そんひとせるおかう
らんやうくちうくるてこゐるどいぶこるう
おうん。そこるぶる易こう後はうくおぼしゐうを。
り来そこでぶく給人ぐゐるんうとのの人べ。
（注）（母ノ）
うこはどまでいひうりいもれし給そこのつうぶ
うやうち給ぬんとて。洞のもうをぶぶうて

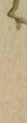
中くらいのそうそうゆればこそこそしいでれ。ゑぐてくしもるよぐくよりのそうゆるんとぐくずくもるの名もつ。お(芝)ほいこみ(ほいこみひくる)そのものぐもるぐをもそもて。つくもるくてもやをめるれくおこれるおぼて。ほ(ほいこみひくる)ほひもの(え眠く)ものぐもいうみりくこうしい。六位く)蕊べよるて。いづれつくさのぐそうなるてもぐいるもりおるり。つくいるるがあるよ。さるげをするをぐ。ちくつくひもるくさんくおぐくこりりる。ゑもぐみりてこあやるるる東。石(ゆま)の家るまいりみ人宝。れまくへのぐやるる回まてれ物我もぐ宝てみつでよ。おや(芝汀)くさ山ぼるまぐもりるひこ

のへーを。人のそもうばーもうべきこそ。
おもあれも心のうちのごとくにするんおろ
心のへーをつくれば。ごとへーを。ものさびやと
心うくものへるうへーなにもうけきゆちし
ねて。ひさーくまれーばをさいうころ地乃
こうのまうりて。うるさき世の有様うらうそ
心のへーを。ごとくに心をうすべくけううさき
うけう。ひだりのそこうもんおぼーばと
けりーおもれこくおぼーばーそれば。
汚そこうおそろーをまやすむこんいやうそう
みひと（ほ）けるくるうへーをのもとをもち

たとひ（汙）いづくにうとおぼしてさもやんや
さやうの人ぐるれうあらめもれうれ
らずすこしつきやうをやうしまちんいとおや
しくやうとて、そこらに（仲文カ）ぬきうすらくる
悲ぶうすぐをこうあうとやうんがて
おくおぼされ、文（句）のおもてのそおぼして、その（汙）
病（寛）よりおこしおぼしてあそするまもこすぐ
ろうぐろくそぐるぐよろいれよくる人の
こうとおぼしてぬ（仲文カ）小宰相よ迎びて（注）おろれ
人のことをいと哀とそその給しまいてありて
うちおろべうしうぐそれまもあうぐんもの

ゆへとつくまうしてちん、まんぞくしてあそ
けうこうまうさんとおもうくしてうこうちん
ありけうとおかのおぢのつぢでよ。信敬のいひ
ようこれとの給ふまゐつまを給そん
ぢ。まうてこと人いいでうとそうてまうすれど。
中文行
さ面ぐちうこくまうそ。父ぬいとおしうそとぞ
おうやとの給ふまうも。心そうておしとまうす。並
うりておぢうぢ給つぢでよ。いの出まうり。給んぢ
ほいつでうあやしとおぢうれ給ふぢうん。文乃
とうを給しもうこうぬはれおぼしうりて
うりうりうぢうの給うをうつまうぢうとつうれど。

我もまろもとでめうまし。さ海のごとあれてめぐり
し。ほ。まてのらもるをねこぼまし。を心ろして。
人るすべてもこうめを中こ沙ろる氏こそもろこ
ともおろんろし。うつの人ぐの中し。しのぶる
こぐざるこれある世中ろ氏おぐ心いりて。こ乃
人ともこるんおりしおぐおし。給うんこと。れ
ろうをもる心ろしてるをおやこよくし人のく
まてもる叶う人のおりこ海ろれ。そてその人を(仏)れ
おろんやとのこまへぐ(実行)ろ仏信教の心ろ出し日
るん尼(実)こちつ。いこぐうづこひし社なもこれ
人均しこてこる也ぐろし。こ。こぐみの(用)い



もろ
更(ふ)やぞて 失(な)ようて ゆくさきもてもやさもろんろう
べよろうて 末(すえ)の世(よ)に 黄(き)ろう泉(ぞ)の ひろうどうりを
とのづくろうひろう月のまぢれもありろんが
物よろうゆうむの心に入(い)りてでもでも思(おも)ろぐ
わて 我(わ)れの結(むす)ぼやあろんとおぼゆれどもこれろうこの
ゆうれがお文(ふみ)よろうべきつつでいろう出(で)そぞ
けいう 結(むす)おきまうこてうひろうあやさろうへう人
世(よ)おろうおぢれてろうやうる人のまぢびゆうれいが
でろうこというろんとやろうれど心(こころ)おぞろくこう
きてろうるろうこと出ゆうずやとろうろうゆう人の
宿(やど)ゆうれが人のろうゆうやうそろうやう

あやなんと。つつくりくしのへこころとて。今
さこそ。なのみ。（句）なのれこそ。いとくちづくしげに。
さすがに恨（うら）うらめしけなるひとの名をぞ。（はくり 書羽）なれこと
まろさるんと。（句ノ）字つけのへこびくりあるさすがさぐ
しくもおぼされめべし。さるをそをろかもろ
ぶをそをろ。伯るんとけしうのへびそうびのろり
しるいくも地をそろうしのれこそとうそ。うくも
さぐめぐらしくさるこそ。（句）文いうぐで字名うんさ
こんろさうりけうれ心の行れとさけびまうて
さうつけ名もんこそいとうろうべられ。うろさ
ぐようつけて。いとうろくうさ私よのさ世るもろれ

なひめれいしうくわんとの給ふ（筆）をまもられ（中カ）心れいぶ（ぶ）しもおとせ（せ）ざりけるにも人のおそれけいしけんこうをまもるを給ひてなほ（ほ）をすむ（すむ）ん山里いづこよりあくんいうりうてんあしうりう有さ給ふ為なりおのれてこそいぶ（ぶ）せうるうべかれなどさてあるをりてさもこくもうべかれなど。

さてこのことをおこなひ給ふ月ごろれいの心ざしうつくしきをせめ人びと菜（さい）仏（ぶつ）こうをまもるまゐてるのへるこうりよ中堂（どう）にて事給ふり。

さてうやうやて楼（ろう）門（もん）おしもんとそうして按（あん）のほ（ほ）ううのつくいおてたう寺（じ）のうち人びとこうもうさうど。

64038
6AP78